

尿路に潜伏する稀有な寄生虫か

台湾省 嘉義市 林 德 進

A Rare Latent Parasite ? in Urinary Tract

Tekchin LIN M. D.

Kagi-city, Formosa, China

From my clinical experience of twenty years in Formosa, a kind of microorganisms was found in the human urinary tract, and this organism seems to be a parasite which has never been reported in the previous literatures. It has been impossible for me to study on this organism more in detail because of having trouble on equipment for research work. However, the figures and photographs with this article had been examined by Prof. Kaoru Morishita, Osaka University in Japan, and he stated that this organism was very similar to a microsporum found in dermatomycosis or so from its morphology.

It will be very nice to me if this article would be criticized by many authorities.

緒 言

1938年自分が偶然に患者の尿路から検出した寄生虫らしきものを、その後1956年に至るまで10例に及んで見だし、而も自分の渉猟した限りの文献上にはこれと同一のものを探しえないので、ここにそのありのままを記述して大方の士の御教示をえたいのである。

自家症例

自分は腎臓結核の早期診断に当つて、検尿物の自然沈澱をまち、その下層尿液をとつて一応必ず弱拡大によつて鏡検するのを習慣としているのだが、この間に偶然にここに記述する寄生虫体らしきものを見いだしたわけである。

第1表 患者の性別、年齢、職業及び合併症

症例	姓 名	住 所	本 籍	性別	年 令	職 業	合 併 症
1	林○守	高雄市	福建省	♂	24	商	淋疾、慢性腎臓病 神経衰弱（軽度高血圧）
2	王孫○微	斗天部 （不定）	広東省	♀	29	工	慢性加答児性胃炎、脚気（浮腫） 神経衰弱、妊娠（2カ月目？）、
3	李○春	軍 隊	湖南省	♂	41	軍	慢性ネフローゼ 気管枝性喘息症
4	刘○能	軍 隊	福建省	♂	30	軍	貧血症、神経衰弱 マラリヤ
5	陳○得	不 定	江西省	♂	29	商	神経衰弱
6	王○生	台南市	福建省	♂	33	商	軽度ネフローゼ及び糸球 体腎炎、神経衰弱
7	呂○雄	嘉義県 （梅山）	福建省	♂	23	工	貧血症、神経衰弱

8	林○葉	嘉義県 (梅山)	台湾省	♀	33	無 (商業家族)	脚気(衝心), 膀胱炎 ネフローゼ(心室肥大)
9	施○肴	陸軍病院	江蘇省	♂	27	軍	結核, 神経衰弱
10	蔡沈○	雲林県 (古坑)	台湾省	♀	46	無 (農業家族)	膀胱炎

第2表 患者の尿所見

症例	姓名	色濁	蛋白質	赤血球	白血球	円柱 類円柱	腎上皮	膀胱 上皮	塩類
1	林○守	黄濁色	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(±)	(±)
2	王孫○微	無透色明	(-)	(-)	(±)	(-)	(-)	(-)	(+)
3	李○春	淡濁黄	(±)	(±)	(+)	(+)	(±)	(-)	(±)
4	刘○能	無透色明	(-)	(-)	(±)	(-)	(-)	(-)	(+)
5	陳○得	淡清黄	(-)	(-)	(±)	(-)	(-)	(-)	(±)
6	王○生	無透色明	(+)	(+)	(+)	(+)	(±)	(-)	(+)
7	呂○雄	淡黄帶 褐色調, 濁	(-)	(-)	(±)	(-)	(-)	(-)	(-)
8	林○葉	淡軽黄濁	(+)	(±)	(+)	(±)	(±)	(+)	(+)
9	施○肴	淡濁黄	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	尿酸塩 (+)
10	蔡沈○	淡軽黄濁	(-)	(±)	(+)	(+)	(-)	(+)	磷酸石灰 (+)

虫体の形態

顕微鏡下に見いだされたこの寄生虫らしきものの形態は頗る多様で、大体スケッチA~K図に示されたようである。検鏡下に於ては、いずれも自己運動を示さなかつた。いま図についてもう少し詳述してみよう。

A(写真附図1参照) : この虫体は全10症例に見いだされたものである。全体として乾燥した稲ワラ状の色調を示しているが、細長部は淡黄灰色で特に吸引口を思わせるもののある末節は無色透明に近い。形は日本の徳利状ないし釣のうき状で、長さ約 45~52μ, 巾約 12~15μ。

全虫体とおぼしきものはきわめて薄い而も透明な籠膜様外殻で包まれて、全体を膨大部(或は体部)と細長部の2部分に分けられる。この細長部は長短が不同のほか、彎曲したり真直ぐなものなど種々である。

膨大部と細長部の接続部には特殊の所見は無いが、膨大部は全体として数節に分かれている。大体膨大部は4~5節、細長部は1~5節から成っているが、細長部は膨大部と異つて節足動物の節足或は竹節状になっていて、また細長部の真直なものにはその末端に吸引管様の開口がみられる。併しこの開口部から体内部をいかに連絡しているかは全く不明である。

膨大部の末端部に2点の暗褐色小点を認めたものがあつたが、その詳細の構造は不明で而も全10症例中の1例にしか認められなかつたから、その意義も不明である。

B(写真附図2参照) 一見バナナ状を呈している。長さは約 62μ 巾の最も広い部で 15μである。全体が籠膜様外殻で8つの節を包んでいて、各節間の境界は明瞭であるが、全体として黄褐色を呈している。

而もこれは全10症例中の1例に於て認められたものでA体を認めた当人の尿中に20時間の間隔をおいて見いだしたもので、AとBとは元来同一のものであるが、その發育時期が僅かに異なるので、その形態もまた異なるのであろうと考えられる。そうすればBはAよりも老成したものであろう。

C これは2例(林○葉、施○肴)に見い出されたもので、2つの三角形の基底が相接して結局菱形を呈している、その全体を透明な嚢膜様外膜が被覆している。各三角形の尖部は円味を帯び、色調は林○葉例は淡黄褐色であるが、施○肴の例は比較的濃黄褐色で、図示のように斑紋を認め、この斑紋や両三角形の境界線は褐色である。またその他の構造等是不明であるが、大きさは縦9 μ 、横約5.5 μ と思われる。

私は、CもAも同じもので、やはりその發育時期が異つてゐるのではないだろうかと推察している。そして虫卵らしいものの検出がないので、CはAよりも幼弱なものであり而も体部の分裂節片よりも一段階進んだ時期の形態ではないかと考えている。

D(写真附図3参照)これは蔡洗○尿から検出したものである。一見Bに酷似しているが、長さ約31 μ 巾約6.5 μ 、Bよりも小さく且つ暗褐色を呈している。やはり透明な嚢膜様外殻で5節に分かれている体部を包んでいるが、末尾部には外殻から突出した淡灰白色ないしは無色透明に近い崩壊しかつたか一節片がある。濃褐色にみえるので各節のそれ以上の構造はやはり不明である。この患者からのみ検出され而も毎回の全尿検査で1ないし数個を見い出した。

E:円形或いはやや卵形をとつて、淡黄褐色を呈し、長径約9~10 μ 、横径約7.5~8.5 μ で一見アメーバーのZystenformを思わせる。全体にその本態の不明な微塵様小点が散在する。嚢膜様外殻のあるもの或いは無いものと一様ではない。

これもやはり蔡洗○尿からのみ検出されたもので、而もAなどと同時に排出されるので自分は膨大部分裂断節と考えたいのである。

強いてこのものと鑑別するものをとえば、原虫類、白血球、赤血球或いは脂肪滴であろうが、細胞核がないことで前二者から、微塵様小点及び嚢膜様外殻の存在する点や色調などから後二者との区別が容易である。

F、G(写真附図4参照)、H、I、J及びK いずれも大同小異でAないしBの小さいものと考えてよい。

ところで自分はAからKまでを並べ眺めてこれは凡て同一のもの即ち何か寄生虫体の發育期の異つてゐる

ための姿であると解釈したいのである。

併し一開業医の貧弱な設備と寄生虫学に対する乏しい知識によつては、これ等の姿がいかよの順序を以つて一連の姿にあるか、ということは明かにすることは出来ないで、その点は自信を持ってないが、寄生虫体として、ひとまず次の様な發育状態を仮想しているのである。

虫体の發育様式

未だ虫卵を検出しなかつたが、Eのような虫体の分裂断節を思わせるものを検出した以上は、まずBまたはDのような成熟した各節の分裂によつてEのような幼弱期形態を産出することが推察され、而してEからCの形態となり、更にFのような4個の節を一聯の嚢膜様外殻で包裹された虫体となり、次いで環境の相違によつてG₁或いはG₂の二様の姿に分かれるものであろう。G₁もG₂も5節から成つていて一聯の外殻で包まれ、而も短いG₁には1条、G₂には2条の不連続性半透明で屈折率の異なる(すじ)が縦走している。吸引口のようなものは、何れにも見当たらない。ただG₁にはAの細長部になることを想わせる形態の変化が認められた。Gから更にHに変わるが、斯くなれば既にAを想わせる姿となり細長部となる部は2節になつてゐる。吸引口らしいものはHにも認められない。

自分はこのHからAに、AからB、Dの成熟形態になり、更にE→F→G₁→Hとなりこの循環をくり返すもののように考えるのである。

ところがG₂のように、両端いずれの方向からもAの細長部となるような秉地を見い出しえないものからは、Iに変わるのではないだろうかと考える。Iは一見マクワ瓜を想わせる形をなして、一箇の嚢膜様外殻で包まれ、而も全体が7節から成つていて、それに二条の縦走曲線がみえる。吸引口は見当たらず、これから更にJにもなるのでなからうか。このJは一回だけ見出したが、Aと異つてその膨大部は7節から成り、細長部は1節である。併しその他はAもJも色調、縦走曲線ないし吸引口などは相似である。恐らく發育するに當つて環境の相違により或いはA、或いはJの二様の形態をとり、更に成熟期に移つて生代を循環するものであろう。併しまた異常例として、時にKのように膨大部と細長部との区別がはつきりつけ難くて、合計9~15節からなる全体を嚢膜様外殻で包んで、恰も野球のバットを短縮した観を呈するものである。而も全検査中に卵と思われるものを認めたこともなく、雌雄生殖器もみられず、さらに虫体の自己運動を、100個

以上を検出していながら観られなかつたことは交尾の可能性を否定し、上述の各発育期の形態と併せて考えて、本寄生虫は無性生殖をとるものではなからうかと考えざるをえない

そ の 他

感染経路、潜伏部位等想像をたくましくすることはできるのであるが、それは反つてこの問題をこん乱させる結果となるだけであるから、ここには述べることを控えたい。ただかかる寄生虫の存在が日本にはみられないとすれば、尿肥を施した蒜を生食する中国人の習慣が、役目を演じているのではなからうか。即ち飲食物を通じて消化器に入り、そこから血流またはリンパ流によって腎に到達し尿路に入るのではなからうか、などと考えるのである。

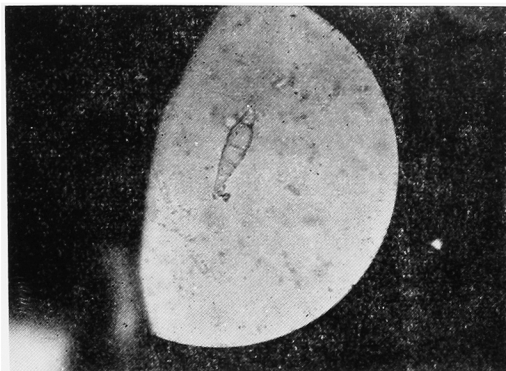
臨 牀 所 見

これ等の患者に於て独自の臨牀症状を認めることができるか、といえは既に示した表に於てもみられるように、独自のものはないのである。腎炎、膀胱炎を凡ての者が来しているとは限らない。ただ眼を惹くことは10名中7名に、神経衰弱様症状を呈していることで、かかる寄生虫の寄生を受けた者の受ける障碍の一面を語つているといえよう

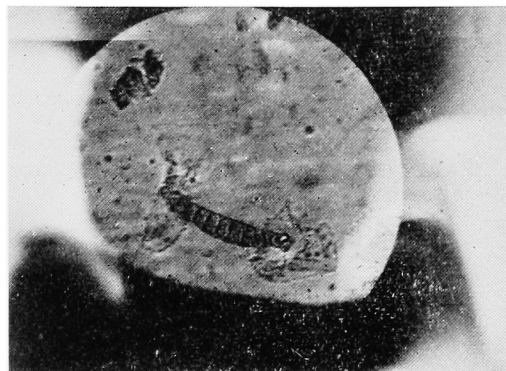
結 語

私自身が台湾省で過去20年間に経験し、而も未だ文献上にもその報告をみない尿路に寄生する一種の寄生虫らしきものについて報告した。ただ一開業医の仕事なので、詳しい討究はできなかつたが、今回はかかる寄生虫らしきものの存在だけを報告して、諸士の批判を受けることにした。

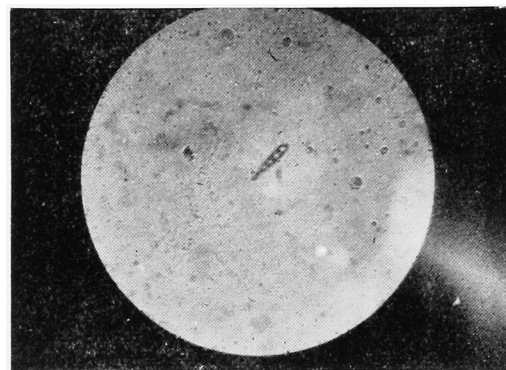
而も実はこの論文を過般大阪大学森下薫教授に附図、写真と共に提出して御批判を願つたのであるが、同教授からはその形態、大きさなどから考えて皮膚真菌症にみられる例えば *Microsporum* の如きもの、またはそれに近いグループのものではないだろうか、との御教示をえたが、この点またひろく批判を受けたいのである。



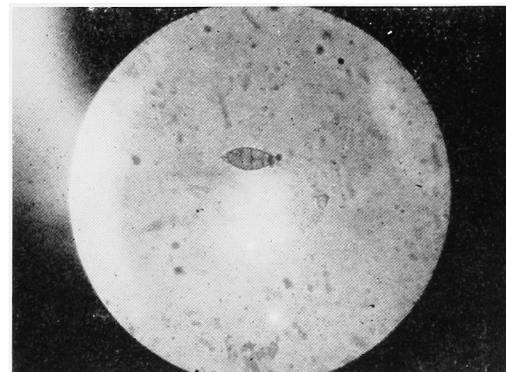
写真附図1



写真附図2

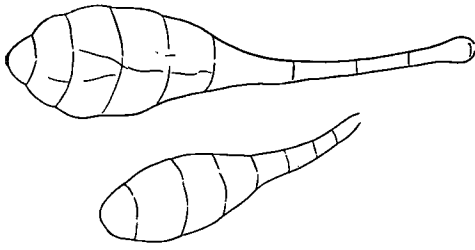


写真附図3

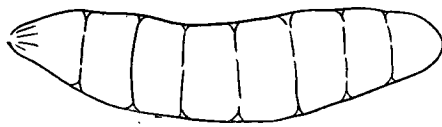


写真附図4

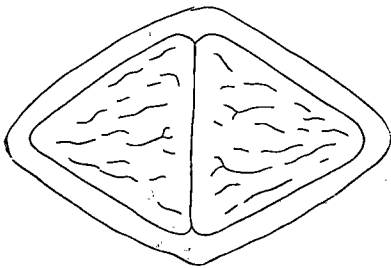
A 図



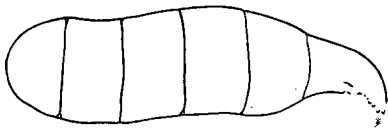
B 図



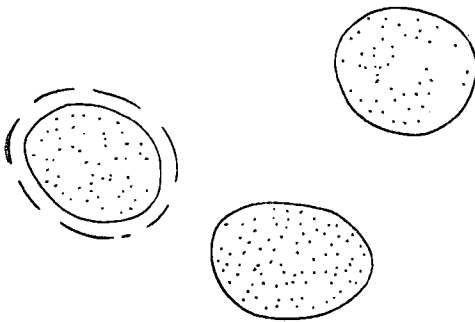
C 図



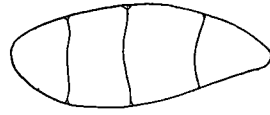
D 図



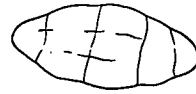
E 図



F 図



G図之1



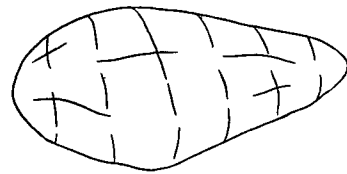
G図之2



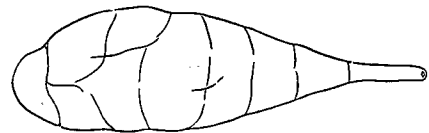
H 図



I 図



J 図



K 図

